

鹿児島の植物55 火山ガスと潮風に耐える硫黄島の植生

植物担当 寺田 仁志

薩摩半島の南に位置する3つの島々（硫黄島、竹島、黒島）は三島と呼ばれますが、三島各島とも日本でいくつか同じ地名の地域があるため、それぞれの島々も区別して薩摩硫黄島、薩摩黒島、薩摩竹島と呼ばれたりします。

でもすごい自然ですよ。他県の三島と違って、大きな特徴があります。

まず、緯度的に温帯から亜熱帯に変わっていく先駆けの島ですので、両気候帯の要素があります。ガジュマルなどの亜熱帯性の植物も低地部ではしばしば見かけます。

ところが他地区の三島と大きく違うのは7300年前に大きな火山活動があつて3島の自然が壊滅的な打撃を受けたことです。それからの回復の仕方が島によって大きく異なってきました。

今回は今も火山活動が続き、火山ガスが噴出している硫黄島の植物の紹介です。

火山ガスは植物にとっても危険です。濃いガスを浴びた地上部は枯れてしまします。また、ガスは水に溶けると強い酸性になり土に溶けます。



イタドリ

このため耐性のない植物は根がダメージを受けるため生えることはできません。

硫黄島の植物は火山ガスという厳しい環境に耐えて独特の植生を作っています。

硫黄島では火口を持つ硫黄岳を中心に同心円状に変化する植生が見られます。

火口に近いところは何も生えていません。火口から離れると、まずコケの仲間が



マルバサツキ

岩にへばりついています。ガスが少なくなるとハチジョウススキやイタドリなどの草が岩陰にまばらに生えてきます。その後

生える密度が高くなると、低木のマルバサ

ツキが混じってきます。マルバサツキは薩摩半島の開聞岳からトカラ列島の宝島までの岩場、特に火山地帯に生える植物で6月頃が見頃です。



ヤブツバキ

ガスの影響が薄れてくるとヒサカキやクロキ、シャリンバイなどの低木林、次いで、リュウキュウチクの大群落が続きます。人の手が入ったり、土砂崩れ等があった場所などはそこにクロマツが侵入しクロマツ林ができています。



ホソバワダン

安定した場所ではヤブニッケイの森ができていますが、その中にはヤブツバキが目につきます。

ヤブツバキは樹木の中で火山ガスにも強いいため、温帯地域にある火山島ではしばしば植えられています。硫黄島でも畑跡や里山、道路辺に植えられ、冬場は蜜を吸いにくるメジロやヒヨドリであふれています。この種子から椿油をとり精製したものが三島の特産品となっています。

海岸で海水飛沫が強く当たるところには植物は生えませんが、荒天時にわずかに当たるところからホソバワダン、ハチジョウススキがまばらな群落を作り、海から離れるにつれ密になります。その中にはトカラノギクの白い花やキキョウランの青い花、青い果実をみることができます。その先にはマルバニッケイが先頭となりシャリンバイ、ハマヒサカキなどが続く黒い低木林が島を取り巻きます。



マルバニッケイ

低木林の奥にはリュウキュウチク林が広がり、硫黄島は竹林が広く占めていることになります。